

---

# 茂みの声

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茂みの声

### 【Nコード】

N9847E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ふとした思い付きで山の中にラジカセを置いてそこで何が聞こえるのかやってみようということになったが入って来た声は。ホラーです。

## 第一章

茂みの音

中学校の放送部のミーティングで。不意にこの話が出た。

「そういえば俺さ」

「何だ？」

「ちよつと考えたんだけれどな」

面長で黒い髪を長くしている学生がふと言ってきた。顔は色黒な感じで寡黙な印象を与える。しかしそれに反して案外話していた。

「考えた？何をだよ」

「録音してみようかなって思ってるんだよ」

こつ皆に言うのだった。机を円卓にしてそこでの話だった。

「ちよつとな」

「録音！？」

「ああ」

彼はまた皆に答えた。

「それな。やろうかなって」

「おい天野」

その彼に部員の一人が声をかけてきた。丁度彼の隣にいる髪の上の方を茶色にして横は黒くしている。その彼が声をかけたのだった。

「それで何処を録音するんだ？」

「ああ、原田」

天野も原田の名前をここで呼んで応えた。

「山の音をな」

「山の音！？何だそりゃ」

「ちよつと聞いたことがあるんだ」

こつ前置きしてから言葉を続ける。

「聞いたことつて何だよ」

「山にラジカセとかを録音できる状態にして置いておくだろ」

「ああ、それで？」

「そうすると色々な声が入っているらしいんだよ」

彼はそう原田と他の部員達に対して述べた。

「それをちよつとやってみたくてな」

「何か滅茶苦茶眉唾な話だな」

原田は天野のその話を聞いて眉を顰めさせた。

「それってな」

「そうか？」

「で、その声って何なんだよ」

「それが色々な噂があるんだ」

天野はこう原田に対して話すのだった。

「色々な？」

「妖精とかそういうのの声かな。入っているっていうんだよ」

「何か余計に眉唾だな」

原田は天野のその話を聞いてさらに眉を顰めさせるのだった。

「妖精か!？」

「ああ。信じないか」

「信じろっていう方が無理だと思わないか」

原田はこう天野に言葉を返した。

「普通に考えてな」

「まあそうだがな」

天野もそれはある程度わかっているようだった。嫌そうな顔をせず答えたのだった。

「それでも一応やってみようと思っただけ」

「何だかな。何も無いと思うがな」

「けれどあれじゃない？」

ここで女の子の声が出た。見ればそこにはセーターを制服の腰のところまで巻いて茶色の癖のある長い髪を少し縦でカールにさせた女の子がいた。目が大きく丸い。ぱっちりとしている。少し太めな感じであるが肌は綺麗で目の光も強い。小さな赤い唇が微笑んでいる。

「それで何か入っていたら面白いじゃない」

「福田」

原田は彼女に顔を向けて彼女の名を呼んだ。

「御前はそれでいいのか」

「駄目で元々よ」

今度はかなり投げ槍とも思える発言だった。

「できたら御の字。だって功成君の考えたことだし」

「おい、幾ら何でもその言い方はないだろ」

「だって功成君っていつも簡単に騙されたりやはりそういうことだったかって言って全然話が違っていたりしてるから」

福田の言葉は容赦がない。

「あてにならないのよ」

「幾ら何でも御前に言われたくはないんだが」

天野も天野で福田に対して反撃する。

「一回でもいいからまともにクロスワードパズル解け」

「麻奈クロスワード得意なのよ」

「何処がだ」

天野は福田の今の言葉を即刻否定した。

「毎回毎回俺か原田が全部答え書いてるじゃないか。この前なんか静脈が筋肉だとか書いていたよな」

「そうだったっけ」

「そうだ。それで行ける高校あるんだろうな」

「一応。それは安心していいから」

「全くそれでだ、原田」

福田との話が一段落したところで原田に顔を向けてまた声をかけた。

「御前は反対か？」

「何も無いと思うがな」

原田は腕を組んで天野の言葉に答える。

「それでもな。やるのはただだしな」

「いいか」

「これで部費がかかってたら絶対駄目だな」

そこははっきりと言いつけるのだった。

「ただでさえこの写真部予算の使い方が滅茶苦茶だって言われるからな」

「高寺先生のせいじゃない」

福田はここでその顔を少しむすつとさせた。それでも携帯をいじっているのがどうにも不真面目な態度に見えて仕方がない。

「変なところに予算注ぎ込んでそれが今までの部費の二倍じゃない。スケジュールの管理も先生が全部やるのはいいけれど毎回毎回ギリギリ越えてるし」

「何であんな人が顧問なんだ？」

「校長先生の制止を振り切って強引になってるんだよ」

原田はうんざりする顔で天野に答えた。

## 第二章

「いい加減顧問をおろされるって話もあるんだがな。予算とスケジュール何とかしないと」

「じゃあおろされるわね」

福田は原田の今の言葉を聞いてあっさりと述べた。

「人の言うことなんて校長先生でも教育委員会でも聞かない人だから」

「まあそうだな。それでだ」

とりあえず顧問の先生の話は置いておいて録音の話に戻すのだった。

「天野、じゃあそれで行くんだな」

「ああ、やってみる」

「失敗したらクロスワードのアシスタント頼むわね」

「御前は少し勉強しろ、あと静脈は筋肉じゃないからな」

そんなことを言いながらまずは録音できる態勢を整えてから天野は学校の裏山の奥に向かった。原田と福田も一緒である。

「何か麻奈この山入るのはじめてね」

「御前街ばかりだからな」

天野が中央にいて最新型の録音機を右手に持っている。右に原田が、左に福田がいる。その原田が天野を挟んで福田に声をかけていたのだ。山道はアスファルトではなく普通の土だ。石が時折見えたり周りには木々が生い茂っている。淡い緑や枝の茶色が見える。

「たまには自然もいいぞ」

「純君ってアウトドアだったのね」

「そうだよ。知らなかったか」

「道理で街であまり見なかったから」

「山も結構いいぞ」

こう福田に対して言う。言いながら周りの木々を見回している。

「落ち着くからな」

「麻奈はクロスワードしてる時が一番落ち着くけれど」

「御前いい加減自分に嘘をつくの止めるよ」

今の福田の言葉には呆れた顔で突っ込みを入れる。

「クロスワード全然解けないだろうが」

「解いてるじゃない」

「一ページで一個いくかいかないかだろ」

つまりほぼ完全に解けないのだった。

「御前商業高校か」

「算盤得意だから」

「せめて最低限のテスト位通れよ、全く」

「カンで当たるから大丈夫よ」

「全く」

そんな話を三人でしながら裏山の茂みの中に入った。福田は道のところで待っていた。

「御前は入らないのか？」

「靴、そういうのじゃないから」

だから入らないというのだ。天野に対して答えていた。茂みは膝のところまで草が鬱蒼と生い茂っている。天野も原田もその草を足で掻き分けつつ中に入っていつていた。

「悪いけれどここで待たせてもらうわ」

「そうか」

「置く場所はまだ見つけたの？」

「ああ、ここがいいな」

ふと茂みの真ん中に入った。そこは何故か草がまばらで尚且つ低かったのだ。

「ここに置くか」

「！？何かそこって」

福田はその場所を道から見てふと気付いた。

「そこだけ草がないわね」

「ああ、だから丁度いい」

天野はこう答えた。

「ここになら置けるな」

「そうだな。後は雨が降っても大丈夫なようにこの薄いビニールで包んで」

原田が録音機をビニールで包もうとする。しかしここで天野が言うのだった。

「いや、大丈夫だ」

「大丈夫!？」

「ああ、この録音機は防水だ」

こう原田に言うのだった。

「だから大丈夫だ」

「ああ、そういえばそうだったわね」

福田は今の天野の言葉であることを思い出した。

「高寺先生が買ったんだっけ。校長先生に一切話さずに」

「またか」

原田はその話を聞いて呆れた顔で声を出した。

「またそんなことやったのか、あの人」

「校長先生カンカンだったらしいわ。幾ら何でもそんなものいらないだろうって」

「俺もそう思う」

「俺もだ」

二人もこれに関しては校長先生に賛成した。

「冗談抜きであの人そのうち学校にいられなくなるだろ」

「何でもかんでも自分を押し通そうとするからな」

「そうね。教師としての才能と情熱と根気は凄いのにね」

「それでもな。あれはな」

原田は言う。

「無茶苦茶過ぎるさ。まあ録音はな」

ここでは話を録音に戻す。

「ここで本当にいいだろ」

「そうだな。じゃあ」

「けれど。何かそこって」

福田は二人がいるその草のない場所を見て言った。

「変な形してるわよね」

「変な形!？」

「そこだけ全然草ないじゃない」

まず言うのはそこだった。

「それに人型だし」

「そういえばそうだな」

「何かな」

「あからさまにおかしいけれど。そこに置くの?」

「ああ、そのつもりだ」

福田の言葉を聞いても天野の考えは変わらなかった。

「ここでいいだろ」

「俺もそれでいいと思う」

原田もまた考えを変えない。

「ここにな。置こう」

「そうだな。それじゃあ早速な」

「そこね。何か嫌な予感もするわね」

福田は二人が決めてもまだ怪訝な顔をしていた。

「流石に録音しただけで祟りとかはないと思うけれどね」

そうは言ったが結局それで納得することにした。こうして一日の間録音機が置かれ翌日それを拾い。まずは音が入っているかどうか放送部でチェックするのだった。

### 第三章

「入ってると思うか？」

「さあな」

当然ながら天野と原田もいる。原田は天野の問いに腕を組んだう  
えで応える。もう皆椅子に座ってそのうえで録音を聴く姿勢に入っ  
ていた。

「精々虫の鳴き声が何かだろ」

「それは流石に放送できないか」

「キリギリスとかウマオイならいいんだがな」

どうやら原田は秋の虫の音が好きらしい。最初に出たのはそれだ  
った。

「まあ期待しないで待つか」

「期待しろ。じゃあかけるぞ」

「ああ」

何はともあれこうして録音をチェックするのだった。最初は何も  
聴こえない。しかしやがて。聴きなれない声が聴こえてきたのだっ  
た。

「！？おかしいわね」

最初にそれに気付いたのは福田だった。

「何か聴こえない？」

「何か！？」

「そう。録音の中に人の声が聴こえるわ」

彼女は耳をすませ目を顰めさせながら言ってきた。

「功成君でもないし純君のものでもない」

「大体俺は録音はじめてからすぐにいなくなつた」

「俺もだ」

「ええ、それはわかっているわ」

これは福田が最もよく知っていた。二人は去る時に録音をスター

トさせた。録音の最初にその音が入っている。福田の声も入っていた。だからこれは彼女もよくわかっていているのだ。

「それに。この声って」

「!?!?これは」

次に気付いたのは天野だった。

「この声あれじゃないのか。大人の男の人の声だ」

「そうだな、間違いない」

そして原田もまた。彼等の他の部員達も気付いていった。

「おい、この声って」

「そうだよな。何か言ってるぞ」

「この声だけ大きくできる？」

原田は怪訝な、明らかに何かを探る顔で原田に声をかけた。

「変なこと言ってるみたいよ」

「変なこと!?!?」

「ええ、何かしら」

その怪訝な顔で述べる。

「それ聴きたいんだけど」

「わかった。それじゃあ」

原田は福田のその言葉に応えた。そうしてすぐにその声だけを大きくさせた。複数のボリウムのスイッチのうちある部分だけを動かして調整したのである。そしてそれからまた聞いてみると。

「.....ここでいいか？」

福田は声を聴いて呟いた。

「そう言ってるかい？」

「ああ、言ったな」

「間違いないな」

天野も原田も聴いた。真剣な顔で頷く。

「ここならばね、ね」

「言っている」

「後は埋めるだけだったな」

三人は次にシャベルで地面を掘る音を聴いた。それは結構長い時間続きそれが終わってから。今度は何か水分の多い重いものが落とされる音を聴いた。ドサリ、と。それから土をかけていく音が。それが聴こえてきたのだった。

「……………まさかと思うけれどさ」

福田はその土がかけられる音を聴きながら皆に対して言ってきた。

「麻奈達今とんでもないの聴いてない？」

「ひよっとしたらこれは」

天野も強張った顔で言う。

「まさかな。これは」

「死体を埋めているのか？」

今度言ったのは原田だった。

「ひよっとして」

「ねえ、場所はわかってるわね」

福田はまた怪訝な顔で皆に言うのだった。

「少し皆で調べてみない？これってとんでもないことみたいよ」

「そうだな」

天野が最初に福田の言葉に頷いた。

「皆で行ってみるか。シャベルを用意してな」

「掘り返すか」

原田も言う。

「ひよっとしたら出て来るのはな」

「ただ。出て来たもの次第ではすぐに」

また福田が言葉を出した。

「警察に連絡ね」

「ああ」

こうして三人だけでなく放送部の皆で録音機を置いたその場所に向かいそこを掘り起こしてみた。場所はやはりそのそただけ草が生えていない場所だ。そして実際に掘り起こしてみると。

「……………まさかとは思ったけれどね」

「ああ」

シャベルを肩に担いだ天野が福田の言葉に頷いていた。そのうえで足元を見ている。足元は既にかなりの深さまで掘られておりそこから青いビニールが見えていた。そしてそこから出ている何か白いものも。

「出て来たな」

「これって何だと思う？」

福田もまたそのビニールと青いものを見ていた。そのうえで皆に問うていた。

「麻奈、一つしか思い浮かばないけれど」

「俺もだ」

答える原田の声は強張ったものだった。

「これは。やっぱりな」

「死体だな」

天野も言う。

「これは間違いなくな」

「そうよね。それでどうするの？」

福田は強張った顔で二人に対して尋ねる。

## 第四章

「これって。洒落にならないわよ」

「洒落にならないなんてものじゃないだろ。これはすぐに警察に通報だ」

「やっぱりそうなのね」

天野の言葉を聞いて頷く。やはり結論はそれだった。

「警察よね」

「他にどうこうすることもできないだろ、俺達には」

「そういうことね。それじゃあ」

こうしてこの死体のことは警察に通報された。そこから大騒ぎになりマスコミが来るわ警察は真犯人を捜そうと躍起になるわ結果として真犯人が見つかってそこからドロドロとした愛憎劇まで伝えられたがこれは天野達には関係ない話だった。彼等はあることが気になっていたのだ。

「事件のことは置いておいてな」

部室で。天野が言うのだった。原田と福田もいる。今部室にいるのは三人だけだった。

「問題はやっぱりあれだな」

「何であんな音が録音されていたかよね」

流石に原田も今回ばかりは携帯だのクロスワードだのをいじってはいなかった。深刻な顔で二人に対しているのだった。

「何でだと思っ？」

「天野、御前言ったよな」

原田は強張った顔で天野を見つつ彼に尋ねた。

「録音できる状態にして置いておいたら音が取れるって」

「言ったださ。それでもな」

「これは考えていなかったってことか」

「精々妖精か何かだと思っっていた」

天野は暗い顔になっていた。その顔で答える。

「それでもこれはな」

「考えていなかったか」

「妖精どころかね」

福田も言う。

「これって。何だと思う？何であんな音が入ったと思う？」

「事件のことは置いておくって言ったけれどな」

福田の今の言葉に原田が答えてきた。

「殺人事件だったよな」

「ああ」

「ニュースで五月蠅い位に言っているわよね」

他の二人もそれに答える。

「妻子ある男と不倫して別れる別れないで殺されて」

「それで裏山だったな」

「話としてはよくあるな。それでかなり怨みを飲んで死んだ」

原田はそこを指摘する。

「それで。録音させたんじゃないのか？俺達にこのことを知らせた  
いから」

「それでなのね」

「そうじゃないのか？」

原田は福田の言葉に対してこう返した。

「それであんな音が入ったんじゃないのか」

「俺達はそれを聞いて掘り返した。それで事件がわかった」

天野は言う。

「そういうことか」

「これだと話が合うな」

原田はこう結論付けたのだった。

「全部な。会っただろ」

「そうね。ただ」

「ただ。何だ福田」

天野は今度は福田に対して尋ねた。

「何でこんな音が入ったの？そもそも妖精の声だのが入るっていうこと自体が普通に考えておかしいじゃない。まあこれ言ったらどうしようもないけれど」

「科学とかそんなのじゃ説明がつかないってころか」

「まあ麻奈馬鹿だけれど」

自分で前置きしたうで述べる。

「面白いからやってみたらって言ったけれどここが全然説明つかないのよね。麻奈達が殺された人の死体を見つけたってこともそうだけれど」

「説明がつかないか」

「全然。違う？」

「そうだな」

福田の今の言葉に最初に頷いたのは天野だった。

「俺も話に聞いてやってみようと思ったがそこまでは考えていなかったよな」

「そうでしょ！？殺された人が麻奈達に伝えたかったって気持ちはわかるけれどね。どうして音が入ったかは全然説明つかないじゃないかい」

「説明つかないこともあるか」

何故か原田はふと呟くようにして言葉を出した。

「世の中って何でも説明できるものばかりじゃないのかもな」

「そうなの」

「何でも説明できたら今みたいなことにはならないだろ」

原田はそれをまた二人に対して述べた。

## 第五章

「こんなおかしなことにはな」

「そうなるか」

天野が最初に原田のその言葉に賛成した。

「この話はな」

「納得できないけれどね」

「だから。納得できるものばかりじゃない」

原田は今一つわからない顔で首を捻る福田に対してまた言った。

「何でもな。何かそう思えてきたな」

「そういうものなのね。結論としては事件が解決したからいいってことになるのね」

「そういうことになるな。まずは一件落着か」

天野が今の福田の言葉に頷く。

「ただ。またしようとは思わないな」

「止めておくべきね」

「俺もそう思う」

これについては二人も止めたのだった。

「今度は何を録音するかわからないわよ」

「もつととんでもないものかもな」

「そうだな。この話だつてなかったことになってるしな」

放送部どころか学校全体であれこれと言われているが表向きはそういっていたのだ。三人も集まればこうして話をするがそれでもだった。

「止めた方がいいな」

「麻奈純君の意見に賛成」

二人の結論は変わらなかった。

「功成君もでしょ」

「ああ。それを聞いて正気でいられるとは思えないしな」

天野も呟くようにして結論を出したのだった。

「止めておくか」

「世の中には訳のわかることだけがあるんじゃない」

天野はこのことをまた二人に対して述べた。

「訳のわからないこともある」

「聞いてはいけないこともある」

「なかったことになることもね」

三人の言葉が続いた。

「それに巻き込まれないようにする為にもな。止めておくべきだ」

「正直今回麻奈も怖かったわ」

「妖精もいい奴ばかりじゃないみたいだしな。世の中は一つだけじゃない」

原田のこの言葉が結論になった。天野も福田もこの結論に対して何も言えなかった。言えずに天野が話を変えてきたのだった。

「そついえばだ」

「どうした？」

「高寺先生やっぱり顧問首になるらしいな」

このことに話を変えるのだった。聞いていい話に。

「校長先生から色々行動を改善するように言われても全然聞かなかつたからな」

「確か毎日学校に寝泊りしていたんだっけ」

福田が呆れた声で尋ねてきた。やっとという感じでクロスワードを出しながら。

「ずっと仕事していて」

「何でも他のクラスの授業や教育にまで口出ししていたらしいからな」

天野がこのことを言った。

「しかも全学年の全クラス、全生徒に対してな」

「おまけに全教科でだろ」

「ああ、そうらしいな」

原田に対しても答える。

「それでいつも不眠不休だったらしい」

「それって幾ら何でもまずいんじゃないの？まあまずいから顧問首になるんでしようけれど」

「顧問だけじゃなくて学校からも左遷らしいな」

天野は今度は福田に述べた。

「教育委員会で預かりらしいな」

「凄い話になってるわね」

「後任の顧問は井上先生らしい」

天野はこのことも告げた。

「どうなるかな」

「とりあえず破天荒だけれど意外と繊細だし高寺先生よりはずっといけそうね」

「そうだな」

最後は現実の話をして終わる三人だった。聞いたことにできる現実の話。だが聞かなかったことになる現実については覚えてはいても噂はしても表には出さないのだった。あくまでなかつたことになつていた。以後三人が茂みで何かをしようとすることは決してなかつた。

茂みの音 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9847e/>

---

茂みの声

2010年10月8日15時38分発行